



新館常設展示「石から鉄へ」伐木模型 撮影/光齋昇馬 白鷹幸伯氏 撮影/能田昭男 磯部保衛氏

先史時代の斧を復元する

新館の歴史コーナー「石から鉄へ」伐木模型に添えられた石斧と鉄斧。これらの斧は、縄文時代から弥生時代の伐木技術について来館者に理解を深めてもらうため、愛媛の白鷹幸伯さんと新潟の磯部保衛さんに製作していただいた復元品だ。

先史時代の遺物は、本来の形で出土することは稀で、鉄の場合は錆がこびり付いて刃物であったことさえわからない事もある。このような遺物の形をそのまま復元しても本来の形をイメージしづらいので、本来の姿を推定した形の石斧と鉄斧を復元することとした。

鉄斧の刃を製作した白鷹さんは、古代道具の復元に30年以上のキャリアを持つ。1983年の道具館開館当初から斧・鑿のみ・ヤリガンナなどの道具復元を手掛けている。薬師寺西塔再建の「千年の釘」でも有名な鍛冶屋さんだ。「今回驚いたのは、日本人にとって最初の鉄斧である板状鉄斧の形がとても合理的ということ。刃を装着する柄の孔は、刃がくさびのように働いて落ちないように作られています。柄の形も伐採時に斧の重さが有効に働くようにできています。昔の人の経験の集積ですね。」白鷹さんはい

つも、みずから過去の資料を熱心に調べてから製作に臨む。真摯に、楽しんで道具の復元に向き合う様子が、斧の打ち放しの鉄の表情からも伝わってくる。

斧の柄と石斧の刃を製作した磯部さんは、自身で復元した斧を使って木を伐っている。「ずっと趣味で道具を作っていたけど、考古学研究会を通じて山田昌久教授（首都大学東京）と出会いました。それ以来、考古学の実験をしています。」この経験が道具の復元に活かされる。「柄の出土品は破損したり減ったりしているので、力のかかり方を考えて原型を推定します。木取りは出土品にならって木目を切断しないように原木をくさびで割ります。鋸で外形をとって鑿で石が入る孔あなをあけて、最後に成形します。」苦勞するのは材料の調達だ。「特に折れ曲がった膝柄は大変です。山に入って探すんですが、ちょうどいい角度で幹から枝が出ている木が見当たらない。昔の人は、もしかしたら木の成長段階で枝の角度を操作していたのかも。」と話す。

道具復元は現代の職人にとって、昔の技術と向き合える貴重な機会。この石斧と鉄斧は、白鷹さんと磯部さんが昔の工人の技術に挑戦した作品である。